

寄稿論文

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』に於ける

「香り」や「匂」から喚起される嗅覚的な知覚や感覚

濱西和子

はじめに

『失われた時を求めて』は五感の知覚から喚起される実に様々な連想や記憶に溢れている。

何らかの契機に五感で知覚したものが、突如、話者である「私」の意識に上昇してくる。Et tout d'un coup le souvenir m'est apparu. (突如として、そのとき回想が私にあらわれた。) という無意識的記憶が起きるときに発せられるフレーズである。ブルーストは幼少の頃から病弱で、特に喘息に生涯悩まされ、彼の人生や人格までもこの病に支配されたといえる。それゆえ、「囚われの女」の冒頭にみられるように、朝の空気、湿気や、また大気を通しての音の響きに対する知覚や感覚には常軌を超えた鋭敏さを持っていた。

この小説の冒頭から主人公の「私」が寝つけない夜に、ときには半覚醒状態で自分の寝室から過去に過ごした避暑地のホテルの暗闇の中で一人過ごす不安、また幼少時に過ごしたコンブレの寝室での母親のお休みのキスを待ち続ける夜の期待と失望。菩提樹の葉を煎じたお茶にひたしたマドレーヌの味から突如蘇える記憶。海辺のバルベックでのレストランのナプキンの感触やナイフのざわざわした物音から想いだす、愛する祖母の記憶、貴族の館の内庭の石畳につまずいたときに突如蘇える記憶、またコンブレでスワン氏の訪問を知らせる鐘の音など、五感で知覚した記憶が年代的(クロノロジカル)な順序どおりに現われるのではなく、あらゆる時代や空間を凌駕して意識に昇ってくる無意識的記憶そのものであり、これこそがブルーストの描く特有の感性そのものであり、人間の生来有する知覚、感覚こそ真実(エッセンス)だとするブルーストの真意を、このテキスト分析を通して探求したい。我々の心の中に去来する意識の流れを一つの小説技法として確立し、20世紀の最高の小説として確立したブルーストの偉業は讃えるべきものであることは周知の事実である。

視覚、聴覚、味覚、触角、嗅覚の五感の中で、進化の過程で視覚器官を頂点とし、嗅覚を最も下位な原始的な器官と位置づけるのは一般通念であるが、その位置づけとは逆に、嗅覚で知覚する匂や香りこそ最強で、その記憶は最も強く、記憶の拡がりとして定着は永続性があるとする、ブルーストの唱える本質(エッセンス)とは何かを、この作品の中で展開し探求したい。また匂や香りから連想する隠喩や表現方法の多様性についても分析していきたい。

1. 香り、匂の本質

匂はきわめて捉えどころのない現象で、色も形態も言葉では具体的に説明できないが、しかし多様な表現や、隠喩や擬人的に駆使されるかぎりに於いては、その柔軟さや象徴性は無限大の可能性をもっている。

近代科学では嗅覚よりも視覚に高度な位置づけをしていたが、それに逆行して、自然との交感や、プリミティブなものへの共応、また香りを使って、より人工的な楽園の創造など多様な試みがなされたが、フランス文学では嗅覚からくる匂を一つの文学の表現手段として取り入れようとする試みが文学者の間で起きた。ゾラはリアリズムの貧困を象徴する匂い、バルザックは室内の描写。ボードレーは異国、罪、超越や頹廃など、香りから誘発される想像力とインスピレーションを得て詩作を試み、ユイスマスは『さかしま』の中で香りを調合して人工的な宇宙空間を作り、そこでディレクタントで退廃的な生活を試みた。このように多様な感性との融合で共感作用を喚起しようという時代の傾向があった。

ブルーストの『失われた時を求めて』の中で、匂にこそ、人間の内的、根源的な真理が潜んでいるとし、匂から喚起される無意識的記憶、また花々の香りに潜む性的な隠喩、人格を表すような擬人的表現で、その人物の本質を捉えようとするには、匂にこそ言葉にかわる的確な機能性があると確信した。

この実体がなく捉えどころのない匂だが、しかし人間の脳裏に残留するインパクトは絶大だ。脳科学によれば匂に反応する中枢は、記憶をつかさどる海馬に近い位置にあるからだと言われているが、ブルーストは、この匂の多様な表現法を一つの小説手法として用いた。それはバルグソンの「瞬時に知覚した過去の事象」を生き生きと甦えさせ、永続性をもたせることが出来る無意識的記憶の喚起を表現するのに、匂いは時空を越えて自由に飛来し、強く意識に印象づけられる最高の表現手段と考えたのではなかろうか。

2. 記憶の原風景

家族と共に過ごした Combray はブルーストの幼少時の知覚、感覚のすべてが認知され、記憶を決定づけた「場」となった。Combray から想起する空気、登場人物達、花の香り、スワンの訪問を知らせる鐘の音、高貴なゲルマント大公夫人の名前、来客のある夜、お休みを言いに来ない母親の衣服の衣擦れを待ち続ける苦しみ。これらの幼少時の記憶はブルーストの記憶に深く意味づけられ、決定されたものであり。ブルーストの生涯に渡って Combray での記憶が甦り、これらのイメージや登場人物達が、最後まで関わり円環回帰し未来永劫まで連環していくのである。ブルーストにとって、Combray は、まさにある種の「Parfum」（香り）を連想させる「場」であったのだ。次の引用はゲルマントという名前から Combray を連想する場面。

Combray の原風景が「香り」によって蘇える、ブルーストにとって重要な人物であった、スワン氏の過去の恋は強い嗅覚の力によって、現実に見ている風景や出来事よりも過去の記憶の方が鮮明に蘇える。

C'est ainsi que je restais souvent jusqu'au matin à songer au temps de Combray, à mes tristes soirées sans sommeil, à tant de jours aussi dont l'image m'avait été plus récemment rendue par la saveur — ce qu'on aurait appelé à Combray le « parfum » — d'une tasse de thé, et par association de souvenirs à ce que, bien des années après avoir quitté cette petite ville, j'avais appris, au sujet d'un amour que Swann avait eu avant ma naissance, avec cette précision dans les détails plus facile à obtenir quelquefois pour la vie de personnes mortes il y a des siècles que pour celle de nos meilleurs amis,

(Du côté de chez Swann pp.183 -184)

(そのようにして、私はしばしば朝までじっと考えこむのであった、コンブレー時代のことを、眠られなかった私の悲しい夜のことを、またずっと現在に近くなって一杯の紅茶の味から—コンブレーでならみんなが「かおり」と呼んだであろう味から—私に映像がよみがえったあの多くの日々のことを、そしてまた、回想の連合によって、この小さ

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』に於ける「香り」や「匂」から喚起される嗅覚的な知覚や感覚

な町を去ってからずいぶん年月が経って私がかくわしく知ったスワンの恋に関することを、その恋というのは、まだ私が生れるまえにスワンが陥った恋であったが、ときにはもっとも親しい友人の生涯よりも数世紀まえに死んだ人々の生涯のほうがかえって容易にそのくわしい細部までつかむことができるものなのだ、...

(スワン家のほうへ p. 239)

かつて Combray で出会い憧れたゲルマントの名を耳にただけで、彼方に消去していたと思っていた高貴で気高いゲルマント夫人のことや Combray の記憶が甦り、その時の空気までも呼吸しているように思え、すべてのものが現存しているような気がするのである。

Et le nom de Guermantes d'alors est aussi comme un de ces petits ballons dans lesquels on a enfermé de l'oxygène ou un autre gaz: quand j'arrive à le crever, à en faire sortir ce qu'il contient, je respire l'air de Combray de cette année-là, de ce jour-là, mêlé d'une odeur d'aubépines agitée par le vent du coin de la place, précurseur de la pluie, qui tour à tour faisait voler le soleil, le laissait s'étendre sur le tapis de laine rouge de la sacristie et le revêtir d'une carnation brillante, presque rose, de géranium, et de cette douceur, pour ainsi dire wagnérienne, dans l'allégresse, qui conserve tant de noblesse à la festivité.

Mais même en dehors des rares minutes comme celles-là, où brusquement nous sentons l'entité originale tressaillir et reprendre sa forme et sa ciselure au sein des syllabes mortes aujourd'hui, si dans le tourbillon vertigineux de la vie courante, où ils n'ont plus qu'un usage entièrement pratique, les noms ont perdu toute couleur comme une toupie prismatique qui tourne trop vite et qui semble grise, en revanche quand, dans la rêverie, nous réfléchissons, nous cherchons pour revenir sur le passé, à ralentir, à suspendre le mouvement perpétuel où nous sommes entraînés, peu à peu nous revoiyons apparaître, juxtaposées mais entièrement distinctes les unes des autres, les teintes qu'au cours de notre existence nous présenta successivement un même nom.

(Le côté de Guermantes I pp. 12-13)

(そんな当時のゲルマントの名は、酸素またはほかの気体を満たしたあの小さな風船の一つのようでもある、私がかそれをやぶって、なかにはいつているものを発散させると、私はその年、その日のコンブレーの空気を呼吸するのであって、その空気は、雨のまえぶれのように広場のすみを吹く風によってかきたてられるさんざしの匂をまじえているし、その風はまた、聖容器室の赤いウールのカーペットから日ざしをとびたせるとかと思うと、こんどはふたたびそのカーペットの上に日ざしをひろげ、ゼラニウムのばら色に近いあかるい肉色と、祭礼にいかにも高貴さをそえる歓喜のなかのいわばワグナー的なやさしさとで、そのカーペットを被うのであった。しかし、いまは死んでしまったシラブルの内部に、原存在の実体が、ふるえ、ふたたび元の形とその彫りとをとりもどすのを、突然われわれを感じる瞬間のような、そんなまれな瞬間はべつとしても、また種々の名が、まったく実用的にしかつかかわれていない日常生活の目まぐるしい渦巻のなかで、あまりにも早くまわって灰色に見える七色の独楽のようにそのすべての色を失ってしまっても、逆に、われわれが、夢想のなかで、過去に立ちかえるために、われわれを巻きこんでゆく無窮の運動をゆるめ、停止させることを考え、それにつとめるとき、われわれの生活の流につれておなじ一つの名がつぎつぎに変えたその色調が、たがいに並置され、しかもその一つ一つが他から判然と区別されて、すこしずつその姿をあらわすのをわれわれは見るのである。)

(ゲルマントのほう I p. 8-9)

3. 匂の表現

匂を感知するという動詞は「sentir」であるが、次のような意味合いにも使う。

- ①感じる
- ②匂を嗅ぐ
- ③匂を発散する
- ④ (比喩的に) 様子をしている
- ⑤感じとる、気づく

3-1. 比喩的表現

匂は実体がないので、「～のような匂」と比喩的な表現として、例えられ具象化することが多い。

いまは廃居となった部屋の黴臭いに匂、森林とアンシアン・レジームがあわさった匂と抽象的な表現をする。一体アンシアン・レジームとはどのような匂いなのか。

このように無色透明で無形な匂をどのように表現するのか。まさにブルーストの多様な表現の可能性を示唆しており、こころの内から湧き出てくる無意識な流れを言葉で具象化する力は絶大である。

Autrefois, je ne m'attardais pas dans le bois consacré qui l'entourait, car, avant de monter lire, j'entrais dans le petit cabinet de repos que mon oncle Adolphe, un frère de mon grand-père, ancien militaire qui avait pris sa retraite comme commandant, occupait au rez-de-chaussée, et qui, même quand les fenêtres ouvertes laissaient entrer la chaleur, sinon les rayons du soleil qui atteignaient rarement jusque-là, dégagait inépuisablement cette odeur obscure et fraîche, à la fois forestière et Ancien Régime, qui fait rêver longuement les narines, quand on pénètre dans certains pavillons de chasse abandonnés.

(Du côté de chez Swann p.71)

(以前なら私は、小さな殿堂をとりまいてウェヌスにささげられているこの森のなかで、そんなにゆっくり休んではいなかった、というのは、部屋へ本を読みにあがるまえに、私は一階にある小さな休憩室にはいつだっていったからだ、その小さな部屋は、祖父の弟で、少佐で退役した元軍人のアドルフ叔父が使っていたもので、そこは、日はさきないがあけた窓から暑さはいってくるときでも、陰湿で、ひやりとする匂、森林とアンシアン・レジームとがあわさった匂、うちすてられた狩小屋などにはいつだって鼻孔をうっとりさせるあの匂を、つきることなく発散していた。しかしもう何年もまえから、私はアドルフ叔父の部屋にはいらなくなっていた、...)

(スワン家のほうへ p. 92)

調理場からただよってきた匂は、その温かさと安らぎを暗示させる。「調理場の匂」は一つのシーニュであり、言語表現はなくても、理性や知性を超えて万人が抱く定着した連想であり、また味覚と連動したものであり永遠に間歇的な記憶として蘇えてくる。

...et qu'à certains moments, il me semble que pouvoir encore traverser la rue Saint-Hilaire, pouvoir louer une chambre rue de l'Oiseau —à la vieille hôtellerie de l'Oiseau Flesché, des soupiraux de laquelle montait une odeur de cuisine qui s'élève encore par moments en moi aussi intermittente et aussi chaude—serait une entrée en contact avec l'Au-delà plus merveilleusement surnaturelle que de faire la connaissance de Golo et de causer avec Geneviève de Brabant.

(Du côté de chez Swann, p. 48)

(...サン＝チレール通をいまでもまだ横ぎることができるとか、ロワゾー通に部屋を借りることができるとか—部屋

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』に於ける「香り」や「匂」から喚起される嗅覚的な知覚や感覚

を借りるとするのは、その通のロウゼー・フレシエという古い旅館にであるが、その旅館の換気窓から立ちのぼっていた地下の調理場の匂は、いまでもまだたまに、昔とおなじように間歇的に、おなじようにあたたかく、私のなかからあがってくる——そういうことは、ゴロと近づきになり、ジュヌヴィエーヴ・ド・ブラバンと雑談をするよりも、もっとすばらしく超自然的なあなたの世界との接触にはいることであるような気が私にはするのである。）

(スワン家のほうへ pp. 61-62)

3-2. 隠喩

パイの焼ける匂いから誘発されて性的な欲望に連鎖していく、匂の連想は予想もしない方向に連なるように思えるが、実はこの小説の中には花から連想される雄蕊、雌蕊や性的な倒錯など、また神聖な神の祭壇を汚すような不道徳な性愛が、ある特定の花、例えばさんざしの花の香りを通して、性的な隠喩にみちているのである。散歩の途中で生垣からはみ出して咲いているさんざしの花の芳しい香りをかいている場面もあれば、それらが淫靡な性的表現もあり、また秘かに暗示させる性的な隠喩はブルースト特有な世界である。

...et le feu cuisant comme une pâte les appétissantes odeurs dont l'air de la chambre était tout grumeleux et qu'avait déjà fait travailler et «lever» la fraîcheur humide et ensoleillée du matin, il les feuilletait, les dorait, les godait, les boursouflait, en faisant un invisible et palpable gâteau provincial, un immense «chausson» où, à peine goûtés les arômes plus croustillants, plus fins, plus réputés, mais plus secs aussi du placard, de la commode, du papier à ramages, je revenais toujours avec une convoitise inavouée m'engluer dans l'odeur médiane, poisseuse, fade, indigeste et fruitée du couvre-lit à fleurs.

(Du côté de chez Swann, pp. 49-50)

(...その暖炉の火は、パイか何かが焼けるような、食欲をそそる匂を放っていて、部屋の空気はすっかりその匂のかたい練粉になっていたのだが、その匂は、湿って日の光を浴びた朝の冷気で、早くからすでにこねあげられ、「ふくらむ」ようにされていたのであって、その匂の練粉を、いま暖炉の火がリーフ・パイに焼き、それに卵黄を塗り、みぞをつけ、ふくらませて、目には見えないが嗅覚でとらえられる田舎のお菓子、すばらしく大きなパイの「ショーゾン」を焼きあげているのであった、そんな匂のなかにおいて、私は、壁にはめこまれた戸棚や、箆箆や、枝葉模様の壁紙から発する、もっとかたい、もっと上品な、もっとよく知られている、しかしもっとそっけないかおりをすこしでも嗅ぐと、いつもそれらの中間の匂をもっているあの花模様のベッド・カヴァーのところにひきかえし、口に出せない強い欲望に駆られて、そのねばねばした、傷んだ、むっとする、青くさい匂の鳥もちにまみれるのであった。)

(スワン家のほうへ pp. 63-64)

さんざしの花は、「私」にとって Combray の懐かしい香りであるが、この小説の中では一つのキーワードとして使われていて、その香りは性的な隠喩や不道徳な意味合いを暗示する言語の象徴システムとして機能している。生垣から祭壇に連なり、さんざしの香りは神の撰理を汚す性的倒錯、雄蕊、雌蕊に象徴されるようなドロドロとした性的世界に連想が連なっていく。

Je le trouvai tout bourdonnant de l'odeur des aubépines. La haie formait comme une suite de chapelles qui disparaissaient sous la jonchée de leurs fleurs amoncelées en reposoir; au-dessous d'elles, le soleil posait à terre un quadrillage de clarté, comme s'il venait de traverser une verrière; leur parfum s'étendait aussi onctueux, aussi délimité en sa forme que si j'eusse été devant l'autel de la Vierge, et les fleurs, aussi parées, tenaient chacune d'un air distrait son étincelant bouquet d'étamines, ...

(Du côté de chez Swann p.136)

(私はその小道がさんざしの花の大群で一面にうなりをあげながら匂っているのを見出した。生垣は、一つづきの小祭壇の形をなしてつらなり、それらの小祭壇は、仮祭壇を思わせるばらばらにつみかさねられたさんざしの花束に被われて、その下にかくれていた、太陽はそうした花の下にさしこんで、あたかもステンド・グラスの窓を通ってきたかのように、地上に光の基盤格子を描いていた、さんざしの匂は、まるで私が聖母の祭壇のまえにいるかと思われるほどに、ねっとりど、かぎられた範囲にとどまっていた、花はというと、これまた装いを凝らし、それぞれ心も空のようすで、きらめく雄蕊の束をにぎっていたが、...)

(スワン家のほうへ p. 177)

3-3. 匂の擬人的な表現

匂という無機質で形態のないものだが、いつの間に部屋にしみ込んで深淵化してなじみ、いまやその部屋の家具や住人と空気のように一体化して匂は幾世紀を超えて厳然とそこに居住する。

C'étaient de ces chambres de province qui —de même qu'en certains pays des parties entières de l'air ou de la mer sont illuminées ou parfumées par des myriades de protozoaires que nous ne voyons pas —nous enchantent des mille odeurs qu'y dégagent les vertus, la sagesse, les habitudes, toute une vie secrète, invisible, surabondante et morale que l'atmosphère y tient en suspens ; odeurs naturelles encore, certes, et couleur du temps comme celles de la campagne voisine, mais déjà casanières, humaines et renfermées, gelée exquise industrielle et limpide de tous les fruits de l'année qui ont quitté le verger pour l'armoire; saisonnières, mais mobilières et domestiques, corrigeant le piquant de la gelée blanche par la douceur du pain chaud, oisives et ponctuelles comme une horloge de village, flâneuses et rangées, insoucieuses et prévoyantes, légères, matinales, dévotes, heureuses d'une paix qui n'apporte qu'un surcroît d'anxiété et d'un prosaïsme qui sert de grand réservoir de poésie à celui qui la traverse sans y avoir vécu.

(Du côté de chez Swann, pp.48-49)

(その二つの部屋は、田舎によくある部屋—たとえばある地方で、大気や海のあちらこちらがわれわれの目に見えない無数の微生物で一面に発光したり匂ったりしているように—無数の匂でわれわれを魅惑する部屋、もろもろの美德や知恵や習慣など、あたりにただようひそかな、目に見えない、あふれるような、道徳的な生活のいっさいから、無数の匂が発散するあの田舎の部屋であった、それらの匂は、なるほどまだ自然の匂であり、すぐ近くの野原の匂とおなじように季節の景物なのだが、しかしそれはすでに居すわった、人間くさい、部屋にこもった匂になっている、そしてそれらの匂は、いわば果樹園を去って戸棚におさまった、その年のすべての果物の、おいしい、苦心してつくられた、透明なゼリーの匂、季節物であって、しかも家具となり召使となる家つきの匂、焼きたてのパンのほかほかのやわらかさで、ゼリーの白い霜のちかちかしたかたまりを緩和する匂、村の大時計のようにのらりくらりしていて几帳面な、漫然とさまようかと思うと整然とおさまった、無頓着で先の用意を怠らない匂、清潔な白布の、朝起きの、信心家の匂、平安をたのしみながら不安の増大しかもたらさない匂、そのなかに生きたことがなくただそこを通りすぎる人には詩の大貯蔵槽に見えながら、そのなかにいれば散文的なたのしみしかない匂である。)

(スワン家のほうへ pp. 62-63)

3-4. 人格の擬人的表現

人物の性格や身分など、その人物の本質を探り、嗅ぎつけるという意味合いがある。

作品の登場人物達の発散し、かもし出す匂いや香りから人物の性格や、その人の本質を把握する。

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』に於ける「香り」や「匂」から喚起される嗅覚的な知覚や感覚

幼き頃コンブレーの家の客として初めて出会ったスワン氏は、母親と自分との就寝前の語らいを妨げる存在であり、不幸な結婚をしたスワン氏の家庭状況を、その後知ることになるが、「私」である語り手の主人公には、時代が変わっても、コンブレーの少年時代に抱いたスワン氏はマロニエの匂、タラゴンの匂という夏のコンブレーの嗅覚的な記憶としてスワン氏の人物像が残存している。

...quand, dans ma mémoire, du Swann que j'ai connu plus tard avec exactitude je passe à ce premier Swann — à ce premier Swann dans lequel je retrouve les erreurs charmantes de ma jeunesse, et qui d'ailleurs ressemble moins à l'autre qu'aux personnes que j'ai connues à la même époque, comme s'il en était de notre vie ainsi que d'un musée où tous les portraits d'un même temps ont un air de famille, une même tonalité — à ce premier Swann rempli de loisir, parfumé par l'odeur du grand marronnier, des paniers de framboises et d'un brin d'estragon.

(Du côté de chez Swann p.19)

(...またそののち私が正確に知ったスワンから、私の記憶のなかで、この最初のスワンに移るときには、一人の人物とわかれて、それとは異なるもう一人の人物のところへ行くような印象を私はもつのである。この最初のスワン—そんな彼のなかに私は自分の少年時代のかわいらしい過失を見出すのであるが、その彼はまた、のちのスワンよりもむしろこの当時に私が知った他の人々に似ているのであって、この人生にあっては、あたかも一つの美術館のように、そこにあるおなじ時代の肖像画はすべて同一の調子をもち、同一家族のように見えるものなのだ—この最初のスワンは、ひまな時間に満ち、大きなマロニエの匂、フランボワーズのかごの匂、タラゴンの若芽の匂をただよわせていた。)

(スワン家のほうへ、PP. 25-26)

かつては *demi-monde* と称される社交界の高級娼婦だったスワン夫人が、いまはブルジョワ階級にまで昇りつめ、その妖艶な香水の残り香の中に娼婦を称するココットの素性は隠しようもなく伺い知れるようである。

Cependant, ces jours de goûter, m'élevant dans l'escalier marche à marche, déjà dépouillé de ma pensée et de ma mémoire, n'étant plus que le jouet des plus vils réflexes, j'arrivais à la zone où le parfum de Mme Swann se faisait sentir. Je croyais déjà voir la majesté du gâteau au chocolat, entouré d'un cercle d'assiettes à petits fours et de petites serviettes damassées grises à dessins, exigées par l'étiquette et particulières aux Swann.

(A l'ombre des jeunes filles en fleurs p.98)

(とにかく、そんなグッテの日には、階段を一段一段のぼりながら、すでに自分の思考と記憶とをうばわれ、もはやさもしい反射作用の傀儡でしかなかった私は、スワン夫人の香水が匂っているあたりに到達するのであった。早くも私は、チョコレート・ケーキの堂々たる威容をまのあたりに見るような気がした、そのケーキは、プチ・フルを盛ったお皿と、礼儀正しく出されているスワン家独特の、花模様を浮織にした、グレーの小さなナプキンとに、ぐるりとまるくかきずかされているのだ。)

(花咲く乙女たちのかげに 1巻 p.104)

高級娼婦からスワン夫人となり、階級を昇り続けていくコレットは、芸術的美的感覚に優れたスワンの選んだ調度品や化粧台に囲まれながら、結婚生活において終生スワンを嫉妬で苦しめ、フォルシュヴィルとの恋愛でスワンを裏切り、ブルジョワ社会から貴族社会にまで昇りつめていく。いまや社交界の華のように振る舞い、スノッパなヴェルデュラン夫人をまねた話し方までしているが、香水の残り香が彼女の素性をどこまでも隠しようがなく物語っている

ようである。

...n'étaient pour rien dans le sentiment de mon indignité et de sa bienveillance royale qui m'était inspiré quand Mme Swann me recevait un moment dans sa chambre où trios belles et imposantes créatures, sa première, sa deuxième et sa troisième femme de chambre préparaient en souriant des toilettes merveilleuses, et vers laquelle, sur l'ordre proféré par le valet de pied en culotte courte que Madame désirait me dire un mot, je me dirigeais par le sentier sinueux d'un couloir tout embaumé à distance des essences précieuses qui exhalaient sans cesse du cabinet de toilette leurs effluves odoriférants.

Quand M^{me} Swann était retournée auprès de ses visites, nous l'entendions encore parler et rire, car même devant deux personnes et comme si elle avait eu à tenir tête à tous les «camarades», elle élevait la voix, lançait les mots, comme elle avait si souvent, dans le petit clan, entendu faire à la «patronne», dans les moments où celle-ci «dirigeait la conversation».

(A l'ombre des jeunes filles en fleurs pp.103-104)

(...スワン夫人が私を彼女の部屋にしばらくのあいだ通してくれたときに、私の心にひきおこされた彼女のけだかい心づくしと私の身のつまらなさやを味わう感情にくらべると、とるに足りないものに思われるのであった。その彼女の部屋には三人の美しく人目をうばう女、彼女の第一の、第二の、第三の小間使が、ほほえみながら、彼女のためにすばらしいお化粧の用意をしていたのであって、その部屋のほうに向かって、私は、奥さまがひとことお話しあげたいとおっしゃっています、と短い半ズボンをはいた部屋係従僕からつたえられた言葉にしたがって、化粧室からかぐわしい香気をたえまなく放っている高貴な香水に、遠くまで匂っている廊下の、まがりくねった細道をたどるのであった。スワン夫人が彼女の訪問客のもとにかえってからも、私たちの耳には彼女が話したり笑ったりしている声がまだきこえていた、というのも、ただ二人の客のまえでも彼女はみんなの「仲間」に対処しなくてはならないかのようになり、声を高め、洒落や冗談をとばしていたからで、これまでヴェルデュラン夫人が小さな党で、「座談をリードして」いるときに、「女主人」風にやっつけてのけるのをよく彼女がそばできいた、あの話しぶりそのままをまねていたのである。)

(花咲く乙女たちのかげに 1 巻 p. 110)

スワン夫人の香しきサロンも、昔コンプレーの花々に感じた快さと同質のものを見出す。コンプレーの田園で見た汚れなき花々と同じように、香りの作用によって見る人にとって主体的に変容させることができるのだ。つまり香りはいかなる時間や空間も飛遊し、その香りからくる記憶は主体的に好むもの、なつかしいものに変容させることができるのだという、においの柔軟性とその匂を知覚する主体との関係を伝えている。

...me rappelaient que l'Enchantement du Vendredi Saint figure un miracle naturel auquel on pourrait assister tous les ans si l'on était plus sage, et aidées de parfum acide et capiteux de corolles d'autres espèces dont j'ignorais les noms et qui m'avaient fait rester tant de fois en arrêt dans mes promenades de Combray, rendissent le salon de Mme Swann aussi virginal, aussi candidement fleuri sans aucune feuille, aussi surchargé d'odeurs authentiques, que le petit raidillon de Tansonville.

(A l'ombre des jeunes filles en fleurs p.252)

(...私には、「聖金曜日の魔法」の楽章は人間がもっと賢明であれば毎年見ることできる自然界の奇蹟を象徴しているのだ、ということをもふと思ひださせ、また、名も知らない他のいろんな種類の花びらからまれてきてかつてコンプレーの散歩であんなにたびたび私を立ちつくさせたあの甘ずっぱい酔うような匂を伴いながら、スワン夫人のサロンを、タンソンウィルの小さな坂道とおなじように純潔に見せ、おなじように純白に、一枚の葉も加えない花ばかりで装い、

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』に於ける「香り」や「匂」から喚起される嗅覚的な知覚や感覚

おなじように本場そのままの芳香をあふれさせていて、それだけで私を田園への郷愁にさそうに十分であった。))

(花咲く乙女のかげに 1 巻 p. 274)

作家ボルニエ氏に対するゲルマント公爵のコメントに対して、公爵夫人は senti (匂っている) という皮肉を述べている。Senti は「感じられる」の原語だが、同時に「匂っている」の意味にもなる。高貴なゲルマント夫人の言語はシニカルな意味合いに満ちている。

J'insinuai que je n'avais aucune admiration pour M.de Bomier..... Mais si, vous devez avoir quelque cadavre entre vous, puisque vous le dénigrez. C'est long, la Fille de Roland, mais c'est assez senti.

—«Senti» est très juste pour un auteur aussi odorant, interrompit ironiquement Mme de Guermantes. Si ce pauvre petit s'est jamais trouvé avec lui, il est assez compréhensible qu'il l'ait dans le nez!

(Le côté de Guermantes II pp.237-238)

(「いやもう、ばかに退屈でやりきれませんでしたよ、『ロランの娘』は」と、「お二人のあいだに何かうしろめたいかくしごとがおありになるにちがいない、あなたが彼のことをけなされるからには、あれは長ったらしい、あの『ロランの娘』は、まあ、かなりまなましく感じられるところではありますがね。)」

「《まなましく感じられる》はまさにぴったりだわ、あの様にひどく匂う作家には」とゲルマント夫人が皮肉たっぷりに話をさえぎった。「このお若いかたがあいにくあのかたとごいっしょのことがおありでしたら、十分うなずけるのではございませんか、あのかたを鼻持がならないとお思いになっていることも！」)

(ゲルマントのほう 2 巻 pp. 247-248)

ブルジョワ階級で、俗物の典型でもあるヴェルデュラン夫人の、成り上がりのスノッパな人格が、不快なつんとくる匂に象徴されているのが読みとれる。ヴェルデュラン夫人もコレット同様に貴族の階級まで昇りつめ、ついに三度目の結婚でゲルマント大夫人になる。リノ＝ゴメノールは鼻炎用の塗布剤のことで、ヴァントウイユの音楽を聞くときの彼女のいびきの音がうるさいのと、この不快な匂とからめて夫人の芸術的センスのなさを皮肉に語っている。

Cependant j'étais frappé, comme chaque personne qui approcha ce soir-là Mme Verdurin, par une odeur assez peu agréable de rhino-goménol. Voici à quoi cela tenait. On sait que Mme Verdurin n'exprimait jamais ses émotions artistiques d'une façon morale,Mais après quelques minutes de regard immobile, presque distrait, elle vous répondait sur un ton précis, pratique, presque peu poli, comme si elle vous avait dit: «Cela me serait égal que vous fumiez mais c'est à cause du tapis, il est très beau—ce qui me serait encore égal, —mais il est très inflammable, j'ai très peur du feu...

(La prisonnière pp.287-288)

(...その夜ヴェルデュラン夫人に近づいた誰もがそうであったように、リノ＝ゴメノールのつんとくるいやな匂にあてられていた。その薬品のいわれはこうである。読者もご承知のように、ヴェルデュラン夫人は、自分の芸術的感動を精神的にあらわすことはけっしてなく、肉体的にあらわにして、その感動がより避けがたく、より深く見えるようにしていた。ところで、彼女のとくに好んでいるヴァントウイユの音楽の話の人からされると、彼女はじつと無関心のままでいて、彼の音楽にはなんの感動も期待していないかのようであった。.....ところが数分間、不動のまなざしで、放心に近い状態をつづけたのちに、.....その相手にこういったのと変わらなかった、「タバコをお吸いになるのは私にはかまいませんけれど、とても美しいカーペットなものですからね—それもまあ私にはかまわないんです

の—でもこのカーペットはたいへん燃えやすいので、私には火がとてもこわいのです。」…)

(囚われの女 pp. 329-330)

4. 香りや匂に誘発される瞑想や記憶から本質（エッセンス）を捉えようとする試み。

木や音や匂との交歓感覚からくる快感は一体どこからくるのか？しかし、その本質はまだ捉えていない。

Et il est probable que si je l'avis fait, les deux clochers seraient allés à jamais rejoindre tant d'arbres, de toits, de parfums, de sons, que j'avais distingués des autres à cause de ce plaisir obscur qu'ils m'avaient procuré et que je n'ai jamais approfondi.

(Du côté de chez Swann p.178)

(…おそらく二つの鐘塔は、これまで私がほかのものから区別してきた多くの木や屋根や匂や音のところに行って永久に合体したことであろう、それらの木や屋根や匂や音も、おなじようにえたいの知れない快感を私ににあたえたのであった、そしてその快感を私はまだ一度も深めてはいないのである。)

(スワン家のほうへ p. 232)

思考の本質を捉えられない「私」は、日射しや匂の中に共感反応を起こし、その実体を捉えようとし、こころの深淵に眠っている魂を無意識的記憶によって喚起して、その思考の根源を見い出せるのではないかと期待する。

…mon esprit s'arrêtait entièrement de penser aux vers, aux romans, à un avenir poétique sur lequel mon manque de talent m'interdisait de compter. Alors, bien en dehors de toutes ces préoccupations littéraires et ne s'y rattachant en rien, tout d'un coup un toit, un reflet de soleil sur une pierre, l'odeur d'un chemin me faisaient arrêter par un plaisir particulier qu'ils me donnaient, et aussi parce qu'ils avaient l'air de cacher au-delà de ce que je voyais, quelque chose qu'ils invitaient à venir prendre et que malgré mes efforts je n'arrivais pas à découvrir. Comme je sentais que cela se trouvait en eux, je restais là, immobile, à regarder, à respirer, à tâcher d'aller avec ma pensée au-delà de l'image ou de l'odeur.

(Du côté de chez Swann p.176)

(…私の精神は、苦痛をまえにして自分から一種の抑制をおこない、詩句や小説を考えること、自分の才能の欠如からも期待はできなくなった詩への将来を考えることを、すっかりやめるようになった。すると、そうしたすべての文学的な気がかりからまったく離れた境地で、しかもそんな気がかりとはいっさい無関係に、突如としてある屋根が石の上のある日ざしが、ある道の匂が、私の足をとめさせるのであった、というもそれらが私にある特別の快感をあたえたからであり、またおなじくそれらが、私に何かをとりだすようにさそっているのにどう努力しても私に発見できないその何かを、私が目にするものかなたにかくしているように思われたからであった。私はそのかくされている何かを、それらの屋根や日ざしや匂のなかにあると感じたので、その場にとどまって、じっと動かず、目を見張り、息をはずませ、私の思考とともにその映像やその匂のかなたに突きすすもうと努力した。)

(スワン家のほうへ pp. 229-230)

匂や色、形の背後にある本質的な何かを捉えることこそが文学を志す自分にとっての課題であると煩悶するがそれは「私」にとって大きな苦業である。

…du sentiment de mon impuissance que j'avais éprouvés chaque fois que j'avais cherché un sujet philosophique pour une grande oeuvre littéraire. Mais le devoir de conscience était si ardu que m'imposaient ces impressions de forme, de parfum ou de couleur —de tâcher d'apercevoir ce qui se cachait derrière elles, que je ne tardais pas à me chercher à moi-même des excuses qui me

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』に於ける「香り」や「匂」から喚起される嗅覚的な知覚や感覚

permissent de me dérober à ces efforts et de m'épargner cette fatigue.

(Du côté de chez Swann p.177)

(…これまである大きな文学作品のための哲学的主題を探求したたびに私が痛感した困惑や無力感を私から払いさつてくれるのであった。しかし、形、匂、または色のそうした印象が私の意識に課している義務—そうした印象の背後にかくされているものを認識するようにつとめるという義務—は非常に難行であったので、そんな努力から私をまぬがれさせ、そんな労苦から私を救ってくれる口実を、いそいで私は自分自身に求めるのであった。)

(スワン家のほうへ p. 230)

次の文章は『失われた時を求めて』の核となっている箇所である。半覚醒状態の眠りのもうろうとした状態の中でかつての自分の部屋、ホテルの部屋、大叔母の家などに瞑想をめぐらし、そしてヴェチヴェールの匂の喚起によるものは、視覚的、聴覚的なものよりも、もっと本質的な内部の世界に入りこんでくることを示唆している。

Je levais à tout moment mes regards—que les objets de ma chambre de Paris ne gênaient pas plus que ne faisaient mes propres prunelles, car ils n'étaient plus que des annexes de mes organes, un agrandissement de moi-même—vers le plafond surélevé de ce belvédère situé au sommet de l'hôtel et que ma grand'mère avait choisi pour moi; et, jusque dans cette région plus intime que celle où nous voyons et où nous entendons, dans cette région où nous éprouvons la qualité des odeurs, c'était presque à l'intérieur de mon moi que celle du vétiver venait pousser dans mes derniers retranchements son offensive, à laquelle j'opposais non sans fatigue la riposte inutile et incessante d'un reniflement alarmé.

(A l'ombre des jeunes filles en fleur pp.292-293)

(私はたえず目を天井にあげなくてはならなかった—バリの私の部屋の家具調度は、私自身の瞳が私に邪魔にならないとおなじように、私の目ざわりになることはなかった、というも、それらの物はもはや私の器官の付属物、私自身の延長にすぎなかったから—ところがここではたえず目を天井にあげなくてはならず、それがまたひどく高まった天井で、祖母が私のために選んでくれたホテルの一番上のこの部屋は、まるで展望台であった、そして、ヴェチヴェールの匂が、われわれの見たりきいたりする領域よりもっと内的な領域、われわれが匂の性質をためす領域、いわば私の自我のほとんど内部にまで、侵入してきて、私の最後の防禦線に攻撃をさしむけているのであって、その攻撃にたいして、私は気づかわげに鼻すりをしながら、たえず無益な反撃をおこなっては疲れるのであった。

(花咲く乙女たちのかげに 1巻 p. 316)

こころの深層に眠っていた記憶が一杯の紅茶の味覚と香りに喚起され、幼少の頃親しんだ風景や人々が無意識的記憶により、鮮やかに蘇える。またお茶に浸したマドレーヌのお菓子を口にした瞬間、万華鏡のように眠っていた記憶が蘇える。万物は絶え、死、破壊されても味覚と香りだけは、形がなくても忠実に真実を捉え、強く永遠にこころの深いところに残存していて記憶の回想を構築するのであり、ここでブルーストは「匂」から喚起される無意識的記憶によって捉えられる本質(エッセンス)を語っているのではないだろうか。

Et comme dans ce jeu où les japonais s'amuse à tremper dans un bol de porcelaine rempli d'eau, de petits morceaux de papier jusque-là indistincts qui, à peine y sont-ils plongés s'étirent, se contournent, se colorent, se différencient, deviennent des fleurs, des maisons, des personnages consistants et reconnaissables, de même maintenant toutes les fleurs de notre jardin et celles du parc de M.Swann, et les nymphéas de la Vivonne, et les bonnes gens du village et leurs petits logis et l'église et tout Combray et ses environs, tout cela qui prend forme et solidité, est sorti, ville et jardins, de ma tasse de thé.

(Du côté de chez Swann, p.47)

(日本人がたのしむあそびで、それまで何かはつきりわからなかったその紙きれが、水につけられたとたんに、のび、まるくなり、色づき、わかれ、しっかりした、まぎれもない、花となり、家となり、人となるように、おなじくいま、私たちの庭のすべての花、そしてスワン氏の庭園のすべての花、そしてヴィヴォーヌ川の睡蓮、そして村の善良な人たちと彼らのささやかな住まい、そして教会、そして全コンブレーとその近郷、形態をそなえ堅牢性をもつそうしたすべてが、町も庭もともに、私の一杯の紅茶から出てきたのである。)

(スワン家のほうへ、 pp. 60-61)

匂から喚起される意識的記憶は、歳月を超え、時空間を凌駕して、「私」に自由に鮮やかに甦ってきて、その喜びにひたる。

Mais eussent-ils pu jamais n'être que cela pour moi et eussé-je pu, en me les rappelant, les revoir seulement, que soudain ils refaisaient de moi, de moi tout entier, par la vertu d'une sensation identique, l'enfant, l'adolescent qui les avait vus. Il n'y avait pas eu seulement changement de temps dehors, ou dans la chambre modification d'odeurs, mais en moi différence d'âge, substitution de personne. L'odeur dans l'air glacé des brindilles de bois, c'était comme un morceau du passé, une banquise invisible détachée d'un hiver ancien qui s'avancé dans ma chambre souvent striée d'ailleurs par tel parfum, telle lueur, comme par des années différentes où je me retrouvais replongé, envahi, avant même que je les eusse identifiées, par l'allégresse d'espairs abandonnés depuis longtemps.

(La prisonnière pp.28-29)

(しかも、それらの回想や場面は、たとえ私にとってただそれだけのものでしかありえなかったとしても、また、たとえ私がそれらを思い出すことによって、それらにふたたびみえることができるだけであったとしても、それらは、同一のある感覚の力によって、突然私を、私の全体を、つくりかえ、それらを実際に目にしたかつての子供、かつての少年にしてしまうのであった。そこには、単にその天候の変化、部屋の匂の異同があっただけでなく、また私のなかに、年齢の差、人間の置きかえが生じたのであった。つめたい空気の中の薪の小枝の匂、それは私の部屋にはいりこんできた過去の一断片、古い冬から切りはなされた目に見えない一つの流水のようなものであった、その私の部屋は、しかも、そのような薪火の匂、そのような薪火のあかりによって、まるで異なるさまざまな歳月によってのように、何度となく年輪がきざまれていたのであって、私はそれらの歳月のなかにふたたび投げこまれ、それがどんな歳月であるかを見さだめさえしないうちに、長い以前から見すてていた希望の歓喜にすぼりとひたされる自分を見出すのであった。

(囚われの女 pp. 29-30)

だまし絵を見ていてブルーストは記憶に伴う幸福感と、それにとまなう確実性の根拠を求めるのは、ブルーストの長年の探求であり、それは理知的で意識的な記憶では実用的な目的にしか利用されないが、ある音、ある匂がふたたび体験されると、その存在が事物のエッセンスによって生かされ、昔の日々、失われた時を見出させる力をもっている。この無意識的記憶で甦ったものにこそ、事物のエッセンスが存在するのだとブルーストは理解したのだ。

Rien qu'un moment du passé? Beaucoup plus, peut-être ; quelque chose qui, commun à la fois au passé et au présent, est beaucoup plus essentiel qu'eux deux. Tant de fois, au cours de ma vie, la réalité m'avait déçu parce qu'au moment où je la percevais, mon imagination, qui était mon seul organe pour jouir de la beauté, ne pouvait s'appliquer à elle, en vertu de la loi inévitable qui veut

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』に於ける「香り」や「匂」から喚起される嗅覚的な知覚や感覚

qu'on ne puisse imaginer que ce qui est absent. Et voici que soudain l'effet de cette dure loi s'était trouvé neutralisé, suspendu, par un expédient merveilleux de la nature, qui avait fait miroiter une sensation – bruit de la fourchette et du marteau, même titre de livre, etc. – à la fois dans le passé, ce qui permettait à mon imagination de la goûter, et dans le présent où l'ébranlement effectif de mes sens par le bruit, le contact du linge, etc., avait ajouté aux rêves de l'imagination ce dont ils sont habituellement dépourvus, l'idée d'existence – et, grâce à ce subterfuge, avait permis à mon être d'obtenir, d'isoler, d'immobiliser – la durée d'un éclair – ce qu'il n'appréhende jamais : un peu de temps à l'état pur. L'être qui était rené en moi quand, avec un tel frémissement de bonheur, j'avais entendu le bruit commun à la fois à la cuiller qui touche l'assiette et au marteau qui frappe sur la roue, à l'inégalité pour les pas des pavés de la cour Guermantes et du baptistère de Saint-Marc, etc., cet être-là ne se nourrit que de l'essence des choses, en elle seulement il trouve sa subsistance, ses délices. Il languit dans l'observation du présent où les sens ne peuvent la lui apporter, dans la considération d'un passé que l'intelligence lui dessèche, dans l'attente d'un avenir que la volonté construit avec des fragments du présent et du passé auxquels elle retire encore de leur réalité en ne conservant d'eux que ce qui convient à la fin utilitaire, étroitement humaine, qu'elle leur assigne. Mais qu'un bruit, qu'une odeur, déjà entendu ou respirée jadis, le soient de nouveau, à la fois dans le présent et dans le passé, réels sans être actuels, idéaux sans être abstraits, aussitôt l'essence permanente et habituellement cachée des choses se trouve libérée, et notre vrai moi qui, parfois depuis longtemps, semblait mort, mais ne l'était pas entièrement, s'éveille, s'anime en recevant la céleste nourriture qui lui est apportée. Une minute affranchie de l'ordre du temps a recrée en nous, pour la sentir, l'homme affranchi de l'ordre du temps. Et celui-là, on comprend qu'il soit confiant dans sa joie, même si le simple goût d'une madeleine ne semble pas contenir logiquement les raisons de cette joie, on comprend que le mot de 《mort》 n'ait pas de sens pour lui ; situé hors du temps, que pourrait-il craindre de l'avenir?

Mais ce trompe-l'oeil qui mettait près de moi un moment du passé incompatible avec le présent, ce trompe-l'oeil ne durait pas. Certes, on peut prolonger les spectacles de la mémoire volontaire qui n'engage pas plus des forces de nous – même que feuilleter un livre d'images.

(Le temps retrouvé pp.178-180)

単なる過去の一瞬、それだけのものであろうか？はるかにそれ以上のものであるだろう、おそらくは、過去にも、そして同時に現在にも共通であって、その二者よりもさらにはるかに本質的な何物かである。これまでの生活で、あんなに何度も現実が私を失望させたのは、私が現実を知覚した瞬間に、美をたのしむために私がかもった唯一の器官であった私の想像力が、人は現にその場にはないものしか想像できないという不可避の法則にしばられて、その現実にぴったりと適合することができなかつたからなのであった。ところが、ここに突然、そのきびしい法則の支配力が、自然のもたらしたある霊妙なトリックによって、よわまり、ふつととまり、そんなトリックが、過去と現在とのなかに、同時に、一つの感覚を—フォークとハンマーとの音、本のおなじ表題、等々を—鏡面反射させたのであった、そのために過去のなかで、私の想像力は、十分その感覚を味わうことができたのだし、同時に現在のなかで、物の音、リネンの触感等々による私の感覚の有効な発動は、想像力の夢に、ふだん想像力からその夢をうばいさる實在の観念を、そのままつけくわえたのであって、そうした巧妙な逃道のおかげで、私の感覚の有効な発動は、私のなかにあらわれた存在に、ふだんはけっしてつかむことができないもの—きらりとひらめく一瞬の持続—純粹状態にあるわずかな時間を、獲得し、孤立させ、不動化することをゆるしたのであった。あのような幸福の身ぶるいでもって、皿にふれるスプーンと車輪をたたくハンマーとに同時に共通な音を私がかきたとき、またゲルマンの中庭の敷石とサン・マ

ルコの洗礼堂との足場の不揃いに同時に共通なもの、その他に気づいたとき、私のなかにふたたび生まれた存在は、事物のエッセンスからしか自分の糧をとらず、事物のエッセンスのなかにしか、自分の本質、自分の愉悦を見出さないのである。私のなかのその存在は、感覚機能によってそうしたエッセンスがもたらされえない現在を観察したり、理知でひからびさせられる過去を考察したり、意志でもって築きあげられる未来を期待したりするとき、たちまちその活力を失ってしまうのだ。意志でもって築きあげられる未来とは、意志が、現在と過去との断片から築きあげる未来で、おまけに意志は、そんな場合、現在と過去とのなかから、自分できめてかかった実用的な目的、人間の偏狭な目的にかなうものだけしか保存しないで、現在と過去とのなかの現実性を骨ぬきにしてしまうのである。ところが、すでにきいたり、かつて呼吸したりした、ある音、ある匂が、現在と過去との同時のなかで、すなわち現時ではなくて現実的であり、抽象的ではなくて観念的である二者の同時のなかで、ふたたびきかれ。ふたたび呼吸されると、たちまちにして、事物の不変なエッセンス、ふだんはかくされているエッセンスが、おのずから放出され、われわれの真の自我が—ときには長らく死んでいたように思われていたけれども、すっかり死んでいたわけではなかった真の自我が—もたらされた天上の糧を受けて、目ざめ、生氣をおびてくるのだ。時間の秩序から解放されたある瞬間が、時間の秩序から解放された人間をわれわれのなかに再創造して、その瞬間を感じるようにしたのだ。それで、この人間は、マドレーヌの単なる味にあのようなよろこびの理由が論理的にふくまれているとは思われなくても、自分のよろこびに確信をもつ、ということがわれわれにうなずかれるし、「死」という言葉はこの人間に意味をなさない、ということもうなずかれる。時間のそとに存在する人間だから、未来について何をおそれることがありえよう？

しかし、現在とは両立しがたい過去の一瞬に私を対面させたこのだまし絵は〔注1〕、長つづきしなかった。むろん、意思的な記憶の場面なら、人はそれを長びかせることができる、そうするには絵本のページを繰るほどの努力もいらぬ。

〔注1〕 *trompe-l'oeil*、「目をだます、錯覚をおこさせる意で、実物と見まがうほどの徹底的な写実的描写をいい、マニエリスム期からバロック期にかけ静物画や天井画によく用いられた」（新潮社『世界美術辞典』）。

（見出された時 pp. 268-270）

結論

「匂」はあらゆる知性、理性や抑制を凌駕し、空間的にも時代的順序も無視して飛遊し、強く我々の感性に訴えてくる。この匂の特性がブルーストが意識の流れを文学の中で表現しようとしたとき、こころの深淵に深く眠っている意識を匂によって喚起される無意識的記憶を誘発する手段としては最適な小説の手法としたのではないだろうか。様々な感覚はお互いに交歓し、共感しあって固有な感情や経験や記憶を生み出す。とりわけ匂は強い知覚力があり、太古のむかしにまで記憶をたどり、境界なく飛遊し、捉えどころがなく、無色で、記録や貯蔵もできず、何々のような匂としか表現しようがないものである。

しかしブルーストはこの匂の中に隠喩や人物を匂いで、擬人化したり抑喩をしたりして、多様な表現方法があるのを見逃さなかった。この匂いにこそ内的な真理が存するのだという信念がブルーストの本髄である。

近代科学が嗅覚よりも視覚を高等なものとして位置づけたのに対して、ブルーストは人間の根源的なものを知覚する嗅覚に知性よりも優位性をおき、そこにこそ内的な真理が存するのだと訴えているのではなからうか。

マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』に於ける「香り」や「匂」から喚起される嗅覚的な知覚や感覚

「私」が文学の試作の中で煩悶した、「何かをとりだすようにさそっているのにどう努力しても私に発見できないその何かを、私が目にするものかあなたにかくしているように思われたからであった。しかし、形、匂、または色のそうした印象が私の意識に課している義務—そうした印象の背後にかくされているものを認識するようにつとめるという義務」（スワン家のほうへ 229-230）、ここで「私」と偽称するプルーストが長い間探求し続けた物事の本質(エッセンス)に出会い、長く失われた社交界での時間を、自分の本命である小説創作へと自らを導き、過去の意識な中に埋もれた人々や出来事を、もう一度蘇えさせ生命を与えることが、朽ちて死すべき万物の時間の流れに逆らうことができる、唯一自分の義務と確信し、小説の中に見出された時を完結させて、永遠に円環していく時を表現しようとするプルーストの意志と本命にたどりついたといえるのではないだろうか。

引用文献

Marcel Proust, *A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU: Du côté de chez Swann*, folio, 1987

Marcel Proust, *A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU: A l'ombre des jeunes filles en fleurs*, folio, 1978

Marcel Proust, *A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU: Le côté de Guermantes I*, folio, 1978

Marcel Proust, *A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU: Le côté de Guermantes II*, folio, 1978

Marcel Proust, *A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU: Sodome et Gomorrhe*, folio, 1978

Marcel Proust, *A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU: La prisonnière*, folio, 1977

Marcel Proust, *A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU: Albertine disparue*, folio, 1977

Marcel Proust, *A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU: Le temps retrouvé*, folio, 1989

日本語訳 引用

マルセル・プルースト（井上究一郎 訳）、プルースト全集、失われた時を求めて、筑摩書房

プルースト全集1 第一篇 スワン家のほうへ、筑摩書房 1984

プルースト全集2 第二篇 花咲く乙女たちのかげに I 筑摩書房、1985

プルースト全集3 第二篇 花咲く乙女たちのかげに II 筑摩書房、1985

プルースト全集4 第三篇 ゲルマンのほう I 筑摩書房、1985

プルースト全集5 第三篇 ゲルマンのほう II 筑摩書房、1985

プルースト全集6 第四篇 ソドムとゴモラ I 筑摩書房、1986

プルースト全集7 第四篇 ソドムとゴモラ II 筑摩書房、1986

プルースト全集8 第五篇 囚われの女 筑摩書房、1987

プルースト全集9 第六篇 逃げさる女 筑摩書房、1988

プルースト全集10 第七篇 見出された時 筑摩書房、1989

参考文献

- Dominique Jullien, *Proust et ses modèles*, José Corti, 1989
- Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain /I*, Librairie Plon, 1952
- Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust I*, folio, 1996
- Jean-Yves Tadié, *Proust, les dossiers belfond*, 1983
- Jean-Pierre Richard, *Proust et le monde sensible*, Editions du Seuil, 1974
- Julia Kristeva, *Le temps sensible*, Gallimard, 1994
- Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la Perception*, Gallimard, 1945
- Merleau-Ponty, *Sens et Non-Sens*, Nagel, 1966
- アラン・コルバン(鹿島茂・山田登世子 訳)、『においの歴史』、藤原書店、1990
- アンリ・ベルクソン、(合田正人・松本力 訳)、『物質と記憶』、筑摩書房、2007
- コンスタンス・クラッセン他(時田正博 訳)、『アローマ：匂いの文化史』、筑摩書房、1997
- ジョルジュ・ブーレ(山路昭 訳)、『ブルースト的空間』、国文社、1975
- ジョルジュ・ブーレ、(岡三郎 訳)、『円環の変貌 上・下巻』、国文社、1990
- ジル・ドゥルーズ(宇波彰 訳)、『ベルグソンの哲学』、法政大学出版局、1974
- ポール・リクール、(久米博 訳)、『『時間と物語II』』、新曜社、1988
- メルロ・ポンティ、(加賀野井秀一 訳)、『知覚の本性』、法政大学出版局、1988
- 吉川一義、『ブルーストの世界を読む』、岩波書店、2004
- 吉本隆明、『匂いを讀む』、光芒社、平成11年

濱西和子

富山大学医学部(教養)